

WNBA の挑戦

2020.6.8 大神訓章

1. はじめに

娘は小学2年生（8歳）のときに、ロサンゼルスでバスケットボールを始めた。マジック・ジョンソンやマイケル・ジョーダンのプレーを目の当たりにした。ロサンゼルスがホームのUCLA、レイカーズ、クリッパーズのゲームに興奮した。NBA プレーヤーのカードを買いまくり、そのカードでプレーヤーの名前や顔、身長、ポジション・・・を覚えた。アパート前の公園コートでストリートバスケットに夢中になった。そして、クラブチームに入って初めてゲームをした。このとき、いつかはアメリカでバスケットができれば、と小さな夢が芽生えたかもしれない。その小さな夢が小さな目標になり、小さな目標がWNBA プレーヤーという大きな目標に変わっていった。

アメリカでバスケットボールをスタートし、日本のミニ（山形8小）、中学（山形1中）、高校（桜花学園）、実業団（JX）、代表チームでプレーするうちに、アメリカに挑戦したいという気持ちがどんどん強くなっていったように思う。「アメリカでプレーしたい」その一心で一生懸命バスケットに取り組んでいた。ただアメリカでプレーしたいという気持ちだけでは実現できない厳しい要件・環境がわかるだけに、最初から挑戦しないか、または、途中心が折れるか・・・しかし、そんな気配は微塵もなく、全く心配なかった。それは物怖じしない、内心はともかく、堂々と、平然と外国人とコミュニケーションがとれる娘の性格にあったように思う。いつも前向きで、この明るい性格は誰に似たのか。少なくとも父親ではないことは確かである。

そこで、娘の「WNBA の挑戦」をテーマにして書き留めた。本人でなく、親がである。娘が言葉(英語)に苦労しながら、文化・習慣の違う中で、果敢に挑戦する過程を文字にする喜びをしっかりと受け止めて記してみた。



成田空港



NBA 選手カード



公園コート

2. トライアウト

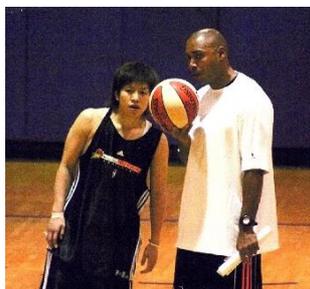
娘は2007年4月13日成田空港を発った。WNBA フェニックスマーキュリーの1ヶ月に及ぶトライアウトキャンプに参加するためである。

トライアウトには、アメリカ国内選手22人、ハンガリー、雄子の24人が参加した。米国内選手は、ルール上、大学卒が条件であり、他国選手は4年以上

の母国でのプレー経験があって、母国協会と母国チームからの推薦があること（二重登録にならないように）となっている。もちろん雄子は JBA 及び JX から推薦されてこのトライアウトに参加している。

トライアウトにはダイアナやキャッピーの中心選手(登録 FIX)は、ヨーロッパリーグのプレーオフ中ということもあり、キャンプ途中からの参加である。キャンプには最大時で 24 人になったが、チーム登録メンバーは 12 人であることから半数の 12 人がキャンプ中にカットされることになる。まさに、サバイバルの厳しいトライアウトである。その状況は戦力にならないと判断されれば、その時点でカットされ、荷物をまとめて帰らなければならない。隣のロッカーを使っていた選手が翌日にはいない。挨拶もままならず、静かにロッカールーム、そしてアリーナを去らなければならない。

そのような振るい落としの悲痛な状況を経て、キャンプ半ばからは観客入りのオープンゲームで更に選考を重ね、1ヶ月後の 5月16日に最終エントリーが発表され、翌日 17日に開幕戦を迎えることになる。選手選考はヘッドコーチのコーリー・ゲインズに一任されている。コーリーのゲームプランはトランジションゲームであり、攻防の切り替えの速いアップテンポのゲームである。従って、速い選手、積極的に攻撃できる強い気持ちの選手を求めている。



コーリーHC



トライアウト



ロッカールーム

3. WNBA 選手登録

今なら LINE ですぐに連絡がとれる。しかも無料である。当時はスカイプで連絡をとったが、時差（-16時間）や互いの空き時間が確認できず、なかなか連絡がとれない。国際電話はどうしても高額になる。それでも最後は国際電話で連絡をとらざるを得なかった。

最終的にメンバーに残れるかどうかわからない。応援行くにもチケットは事前に予約しなければならない。1度予約を入れたが、躊躇して、キャンセルした。再度日程を決めて予約し直す。結果、エントリーが発表になる日（5月16日）をフェニックス空港到着日にした。イチカパチカである。ダイレクト便はない。どこかでトランジット、それはポートランドにした。山形から成田に向かう車中、成田からポートランド、そして、ポートランドからフェニックスまでの機中は気が気でなかった。何度も国際線搭乗の経験があるが、こんなに不安で落ち着かない気持ちで搭乗したのは初めてである。

フェニックス空港には娘が迎えに来てくれた。夕方 17時着。入国手続きを終

えて出口ゲートに向かうと満面の笑みで遠くから待っていた。しかもフェニックスマーキュリーの1番のユニフォームを持っていた。良かったと同時にほっとした。こんな嬉しいことはない。娘の夢の目標であった正式なWNBA選手になったことを知った瞬間、2007年5月16日18時のことである。



フェニックスマーキュリー公式チーム写真



ファン用写真



ユニフォーム



ファン用写真

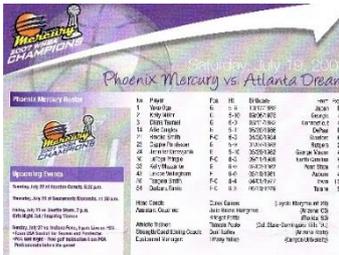
4. 開幕戦

開幕戦は、2007年5月17日19時トスアップのマーキュリーのホームコート、18,000人収容のUSエアウエイズセンター(US Airways Center)で、対戦相手はロサンゼルス・スパークス(Los Angeles Sparks)であった。

オープニングセレモニーが始まった。真っ暗の中、「オーガ」と名前呼ばれてスポットライトを浴びながらコートへ。親の自分が緊張してどうする。鳥肌も立った。国歌斉唱、国旗掲揚にも独特の高揚感があった。

いよいよゲーム開始、トスアップである。第1Qの6分過ぎ、意外と早い出番があった。最初のワンプレーがゾーンアタックでインサイドにナイスパス、アシストを記録。後半速攻からドライブストップジャンプショットで初得点。続いてドライブファールを受けてフリースロー。2本沈めて計4得点。約10分の出場でデビュー戦を終えた。

観客はほぼ1万人。大観衆であった。メディアの方も多い。日本からも来ていた。ゲーム終了後、インタビューを受けてその喜びをしっかりと表現していた。嬉しい限りである。自分もインタビュー受けたが、興奮しっぱなしで、しどろもどろ、何も覚えていない。確か日テレだったと思う。娘と違って日本語で受けながらである。



ゲームプログラム



オープニングセレモニー



デビュー



デビュー



チャージタイムアウト



ハーフタイムファンサービス



センターハングビジョン



サイン会



コーリ HC

5. フェニックスマーキュリー(Phoenix Mercury)

WNBAには、娘がロースター入りした2007年は、13チームあった。現在(2019年)は、12チームである。そのひとつのフェニックスマーキュリーは、アリゾナ州フェニックスにあるNBAフェニックスサンズの女子版である。そのサンズには、シャキール・オニールやスティーブ・ナッシュ等のNBAスーパースター選手がいた。オニールとはアリーナ地下駐車場、ナッシュとは個人練習をしていたサブアリーナで出会い、興奮したのを覚えている。

マーキュリーには、何と言っても世界ナンバーワンの選手であるダイアナ・トーラジがいる。出身大学は名門コネチカット大でNCAA3連覇、2回MVPになり、2004年ドラフト全体1位でマーキュリーに入団。183cmながら全てのポジションをこなす。4回のオリンピックで主力選手として金メダル。3回の世界選手権でも同様。とにかくすごい選手である。娘とはU18世界選手権からの友人であり、憧れでもあった。プレーもさることながらリーダーシップが半端ない。

また、マーキュリーは、ダイアナの圧倒的な活躍もあって前年の2006シーズンに優勝している。そして、優勝チームは、ワシントンでのアウェイゲームの折

に、ホワイトハウスを表敬訪問することになっていた。当時のブッシュ大統領に優勝の報告である。もちろん娘も帯同した。そのとき、丁度、1ヶ月後に、日本で洞爺湖サミットが予定されていてブッシュ大統領も出席することから、娘に気軽に話しかけてくれた。現職アメリカ大統領に会える人はなかなかいない。山形県人では歴史的にみてもそういないのではないか。それだけにラッキーな巡り会い、貴重なひとときであった。

翻って、テキサス州サンアントニオでのアウェイゲームを応援に行ったが、日本チームと明らかに違うことがあった。チームはフェニックスからサンアントニオまで空路で移動後、すぐ練習した。練習後、ホテルにチェックイン。そのとき、マネジャーから「翌日の午前10時ロビー集合」とのひとことで解散。それまでは各自責任をもって行動することになる。夕食も各自で自由にとる。外出しない人はルームサービスをとる。アウェイゲームではどこに行ってもこのようである。

一方、日本ではアウェイゲームではすべてチーム行動になり、ほとんど自由時間はない。夕食は全員一緒。食後はミーティング。就寝時間は決められている。翌日起床、朝食も定時。チームみんなで一緒に決められた時間に、同じ内容で行動する。考えようでは決められた時間に、与えられた食事をするというこの日本式は選手にとって楽であり、安心である。余計な思考はいらない。

アメリカでまさにシーズン真っ只中に、思いがけず娘とゆっくり食事をとり、話をするのができた。「アメリカ選手は自立している。自分で考え、律して行動することができる。自分の行動に責任をもっている。チーム・スタッフは、選手を信頼している。」ということなのか。恐らく、ジュニア期からそのように育まれているのだろう。その経験知をもっているに違いない。社会人として同じような立場でありながら、日米の大きな違いを垣間見た。どちらの善し悪しではない。「自立と責任、主体と行動」を問うに对象的であった。

もうひとつの違いはゲーム前後のロッカールームでの選手達の身の振る舞いである。ゲーム前のロッカー内は、お祭り騒ぎ。音楽をボリュームいっぱいにして踊ったり、そこらの物を投げたり、紙を破いたり、クラッカーを鳴らしたりとそれがアメリカ流の気持ちの高め方なのか。日本では、シーンとしてコーチの話を聞いている。静かに、気持ちを集中し、それからゲームに臨む。

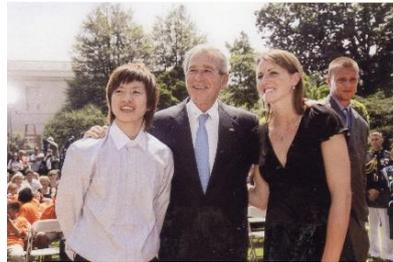
また、ゲーム後はもし負けゲームならそれは大変。「あなたのあのミスで負けた」「あなたがあのシュートを落としたからだ」「あなたがあのリバウンドを獲らなかったからだ」と互いに言い合う。しかもある選手はペットボトルを投げつけながら・・・しかし、ロッカーを一步出ると仲直り、何もなかったかのようにハグして翌日のゲームに臨む。決して敗戦を引きずらない。敗戦は互いにすぐに切り替える。うじうじしない。陰でこそそそ言わない。この落差には聞いて驚くばかり。娘はこのようなゲーム後のハチャメチャな様子を前に、傍観するしかなかったようである。ただゲーム前にはみんなと一緒に踊りもしたと笑いながら話してくれた。このような状況は普段の練習前後も同じようであることにはびっくりもする。WNBA選手には「踊れること」も必要なようである。



チャンピオントロフィー



ダイアナ・トーラジ



ブッシュ大統領表敬訪問 at ホワイトハウス

6. セドナ

セドナは、アリゾナ州フェニックスから車で約 2 時間のところにある。グラ
 ンドキャニオンに続いている壮大な景観。娘の練習休み日を利用して 2 度訪れ
 たが、何度でも来たい場所である。科学的に証明されているわけではないが、セ
 ドナには至る所にパワースポットがある。そのパワーは渦を巻いているといわ
 れて、レッドロックや奇岩、流れる川にもパワーがあり、しかも地中からパワー
 が湧き出ているとも。娘は、セドナのパワーを取り込みたいと、岩の上で寝そべ
 って瞑想に耽る。「大地のパワーを感じる」「美し過ぎて言葉にならない」の趣
 か。この景観に身を置くだけで大きな広い心を持てるような気もする。セドナ
 は、アメリカ人が住みたい場所の 1 番人気でもある。

セドナのパワーの石を桜花学園のお土産にしたことがある。2007 年のこと
 ある。井上先生は気を利かしてくれて、インターハイ、国体、ウインターカップ
 の際に、ベンチに大事に置いて戦ってくれた。その年、見事に三冠をとった。



7. おわりに

これまで多くの外国地を訪れた。地球上の大陸では南米だけが未訪問地である。行って良かったと思う地は、グランドキャニオンやセドナのような景観に魅了されることもあるが、当地の景観ではない。また、スペイン料理やタイ料理の美味しさもあるが、当地の食ではない。

それよりも何よりも友人・知人ができたかどうか。現地（異国地）の方や同じ空間を共有した日本の方と知り合いになれたかどうか。たとえ一過性の友人であっても、そういう方々との触れ合いが多ければ多いほど行った甲斐があったと実感する。また、思い出が倍増するのである。

フェニックスを訪れ、多くの友人・知人と出会えた。今も繋がりがあり、貴重な財産になっている。もちろん娘を通しての友人であるがゆえに、娘に感謝の思いが強い。



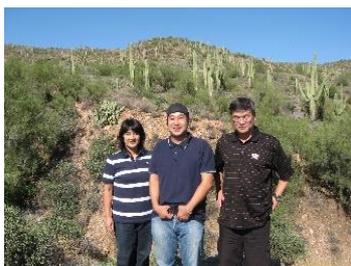
斎藤和巳さん



井口さん



豊島先生



ヒロさん



葛西さん



奥さん達

<特記>

それにしても、大勢のアメリカ人の前で、平気に英語でしゃべり、歌まで唄うという娘の性格に親もびっくり。自分にはとてもできない。



ファン感謝デー